

宮古北高校の友人たちと

ともしび
共生委員会ニュース

2017 年度　3 号

2017 年 9 月 28 日版

宮古を訪ねて

HR306　M.K.

夏期休暇中の８月１日から３日まで、生徒会と文化祭実行委員会、一般の希望生徒数名の計 15 名で、岩手県宮古市を訪問しました。僕がこのプログラムに興味を持ったきっかけは、文化祭実行委員の友達に誘われたことでした。自分は今まで学校主催のプログラムなどに参加したことがなかったので、この機会に参加してみようと思いました。普段の自分だったら、プログラムに行った人の話を聞いて「真面目だな。」と思って終わってしまっていましたが、今回このプログラムに参加して、実際に見聞きして考えることや、自分の知識の浅さに気付くことの出来る貴重な経験となりました。

１日目、新幹線で盛岡へ、そこから貸切バスで２時間移動をして、まず、三陸復興国立公園の浄土ヶ浜を訪れました。浄土ヶ浜では、サッパ船で海中の「青の洞窟」を見たり、海鳥（ウミネコ）とふれあったりしました。そこで、地震や津波で甚大な被害をもたらしたとは思えない、宮古の自然の魅力を体験しました。田老地区へ移動して参加した"学ぶ防災"では、 宮古市田老地区の語り部の方に、震災発生直後の状況や心境など、現地でしか聞けない話をお聞きしました。そして、震災遺構である「たろう観光ホテル」を見学しました。たろう観光ホテルは 1、２階が津波で流されてしまい、鉄骨のみが残っています。その６階から撮られた、津波が町を襲う実際の映像を見せていただき、自分たちも同じところから町の景色を見渡しました。浄土ヶ浜で見た自然の美しさの一方で、自然の脅威と人間の無力さを実感しました。その後は、地元名産のわかめの茎抜き体験をし、宮古市の海の幸を自分達の手で感じました。

２日目の午前中は、仮設住宅から高台移転した住宅街を見学しました。どの住宅も新しく、一見現代的で綺麗な街並みに見えましたが、それも被災や仮設住宅での生活などの苦難を経ていると考えるとなんとも言えない気持ちになりました。また、三王地区集会所にて、被災から高台移転していくまでの具体的な話を、質問を交えながら聞かせていただきました。「高台移転をしても、地元田老を思う気持ちは変わらない」「今回のように訪問してくれることが１番嬉しい」とおっしゃっていて、田老という地域のあたたかさに感銘を受けました。

午後は宮古北高校と交流をしました。昼食とソフトバレーボールを通して親交を深めた後、ディスカッションを行いました。「風化させてはいけないこと」について様々な視点から意見を出し合うことができました。特に宮古北高校の生徒の発言を聞く中で、その言葉の一つ一つに強い説得力を感じました。

最終日は田老駅から三陸鉄道で宮古駅に向かいました。宮古の子ども・若者を中心に地域の活性化に取り組む「みやっこベース」の方の案内で、宮古市の基幹産業である水産関連業について学びました。宮古市魚市場では、宮古漁協の方々に、震災当時の市場や宮古の水産業の復興についてお話をしていただきました。その後、地元企業の共和水産にて、工場見学をさせていただきました。1 日を通して、宮古市、ひいては東北地方において水産業が担う役割の大きさを強く感じました。

この 3 日間で色々な面から、宮古市を知ることができ、震災について自分達の中で「風化」してしまっている部分に気づきました。時間というものがある以上、風化してしまうことは仕方がないところもありますが、風化していかないよう努力することをやめてはいけないと自分は考えます。

今回のプログラムのおかげで、宮古、そして田老という町との出会いや、お話を聞かせていただいた方達との出会いがありました。今度被災地を訪問するなら、また同じ町にもう一度来たいと思えました。この 3 日間で終わりにしてしまうのではなく、今後もう一度被災地を訪問したいです。



サッパ船での遊覧



震災遺構・たろう観光ホテル

◎アートでつながる壁画プロジェクト

2018 年 6 月、震災復興施策として岩手県宮古市と北海道室蘭市を結ぶフェリー航路が就航します。その記念事業として、宮古港フェリーターミナルビルに若者・子供たちが制作した木製パネルを組み合わせた壁画が飾られることになりました。青山学院でも短大を中心にこのプロジェクトに積極的に参加しています。高等部の皆さんも下記のワークショップに参加してみませんか？興味のある人は理科の武藤先生までご連絡下さい。

◇2017 年 10 月 7 日（土）13：00～14：00　@青山学院女子短期大学南校舎教室

◎宮古訪問報告会

グローバルウィーク中の 10 月 3 日（火）12：30～、2 階エントランスにて宮古訪問ブースが設けられます。宮古特産「磯とろろ」の入ったスープの試飲会も行いますのでぜひおこし下さい。数量限定なのでお早めに！

フィリピン訪問からハンドスタンプへ

HR208　O.M.

フィリピン訪問プラグラムは、私に大きな衝撃をもたらしました。貧しい中で暮らす人たちの住んでいる環境や、支援を受けている子ども達の明るさ、どれも私をハッとさせられるものでした。

私は行くまでは向こうの人との出会いよりも、貧困の現状が知りたいという思いが強かった気がします。しかし帰ってきて私がこれからしたいのは、出会った子ども達ともっと繋がりたいということです。それは、友達になった人をもっとよく知りたいし、知ってもらいたいと願うことと同じです。訪れる前も、今も、私は自分達ができることがいかに小さいかを痛感しています。しかし、できることがあるのも事実です。高等部が支援しているセンターの子ども達は、みんな支援を受けられている事を嬉しく思い、それを自分の自信にしていました。その子たちを応援することは、私たち生徒でもできる一つの支援の形だと思います。6月のグローバルウィークでは、皆さんのハンドプリントを集めました。首都マニラのスラムにある支援センターでは、親からの暴力をなくすことを目指して、親子のハンドプリントを蝶の形に集めていました。私たちもそれから着想を得て、暴力ではなく子どもの権利を理解して守っていきたいという意志を表明するために、全校の皆さんに参加を呼びかけることにしたのです。

ここで「子どもの権利」というものについて改めて説明します。私たちは皆平等だと教わり、そうあってほしいと強く思いますが、残念ながらそうではない場合が世界では多く見受けられます。私たちは子どもである以上、健康に生き、教育を受け、暴力から守られ、自己を表現する権利を持っています。普段あまり意識できませんが、日本ではほとんどの未成年は当然のように親や国からその権利が保障されています。しかし、貧困のなかに生きる子ども達にとってはそうではありません。十分な栄養が取れていなかったり、親からの暴力で心に傷を負ったりしている子ども達がいます。「守られる」ということは自分たちにそれだけの価値があると認められることでもあり、自尊心を育ててくれます。守られたうえで、私たちはアイディアを発信し、自分の身を大切にする行動をとってそれぞれの個性を出せるようになっているのです。子どもが成長していく土台である権利が守られていない中で生きていくのは難しく、とても恐ろしいことです。学校にいつまで通えるかわからない、いつ食べることが出来なくなるか分からない中で、どうやって将来への希望を持てるのでしょうか。そんな子どもたちについて、引き続き伝えて行きたいです。

最後に、フィリピンに行く、ということは単に貧困地域の現状を学ぶだけではなく、自分の置かれた環境について考えられる点においても意味があります。私は世界の他の地域で暮らす人と自分の生活を踏まえてより身近に、より深く貧困など様々な問題を考えられるようになりました。将来的に考えても、自分を成長させてくれる経験になったとも感じるので、これからより多くの人にこのプログラムや支援しているチャイルドに興味を持ってもらいたいと思っています。



◎フィリピン訪問プログラム報告会　＆　2017年度　フィリピン訪問プログラム説明会

◇10月2日（月）12：30　＠大会議室（西校舎2階）

◎2017年度　高等部フィリピン訪問プログラム（第四期）　参加者募集

◇参加期間　2018年3月21日（水）～3月27日（火）（6泊7日）

◇募集人数　6名　　◇参加費　180,000円（保険料等含む）

◇申込方法　作文および面接　　◇提出期限　10月25日（水）藤本先生（地理歴史）

東ティモール訪問

HR302　T.K.

私は渡航前、東ティモールは貧しい国だと思い込んでいました。しかし、空港から街に出ると、突然なぜか、心から感動しました。東ティモールという国には、私たちの視点から見た豊かさとは違う、本当の豊かさがあることを感覚的に感じ、それが私に感動として降りかかってきたのかもしれません。日本にいると、自分の利益を考えることに振り回され、「豊かさ」とは何かを忘れてしまいがちです。しかし、東ティモールには、美しい自然や文化、村の中での強い結束力やとても陽気で優しい人々など、自分の利益よりも大切にしているもの、つまり本当の豊かさがあったのです。このように、私は東ティモールの全てに感動し、日本に帰りたくないほど東ティモールが大好きになりましたが、その中でみなさんに一番お伝えしたいのは、東ティモールのコーヒーについてです。

私たちは、標高 1200 メートルに位置するコーヒー産地、Letefoho という村に滞在しました。東ティモールのコーヒーは、世界でも希少種のコーヒー豆です。そもそもコーヒーは、私たち消費者が飲めるようになるまでに選別、脱穀、発酵など、たくさんの行程が必要ですが、東ティモールのコーヒーは、一つひとつ丁寧に手作業で摘み、とても大切に作られています。

また、東ティモールは 2002 年に独立するまでに、日本を含め、多くの国に支配され、多くの内戦が起こり、多くの人や自然を失いました。しかし、何もかも失い、深く傷ついてしまった東ティモールで、唯一奇跡的に生き残っていたのがコーヒーの木でした。これで国をもっと良くしていける。東ティモールのコーヒーはただのコーヒーの木ではなく、多くの人の希望が詰まった宝物なのです。

東ティモールのコーヒーがどれだけ貴重なものかを肌で感じた私たちは、今回のグローバルウィーク II で、まずは皆さんに Letefoho のコーヒーを味わって頂けたらなと思っています。そしてその様子をビデオや写真に収め、Letefoho の農家の皆さんに届けたいと思っています。遠い日本で、東ティモールのコーヒーに興味を持って、たくさんの人に飲んでもらい、それを伝えることができたら、農家の方のモチベーション向上につながり、さらに生活環境や学校教育が改善していくのでしょうか。ぜひこの機会に、東ティモールのコーヒーを体験してみてください。





◎「東ティモールとつながる」コーヒー試飲会

◇10 月 4 日（水）12：40～　＠ウッドデッキ（雨天時、２階エントランスホール）

※　高等部生と保護者の方向けに東ティモールコーヒーの予約販売を行っております。
コーヒー粉　　200ｇ　　800 円
ドリップパック　10 杯入り 800 円、　5 杯入り 500 円、　3 杯入り 300 円
教室に予約表を用意しますので、ご記入ください。
ご質問はお近くのブルーペコメンバーまで。